6 章 出来事の現象学的心理学

――犯罪の被害者・犠牲者となる体験

吉田章宏

- はじめに

現象学的心理学の代表的な専門的研究報告の一つを取りあげ、その内容の粗い素描的紹介を試 仕事が既にいくつもなされている。そこで、本章では、それらの仕事を補う意味もふくめて、ろう。そうした読者に向けては、その歴史、目的、方法、成果、将来についての優れた解説の みることにしたい。ここで取りあげる研究報告は、米国で一九八五年出版の、 「現象学的心理学」について読むのは初めてだ、という読者も恐らくいらっしゃることであ 五章からなる専

試みることとしたい。 筆者に成り代わった口調で述べつつ、紹介者の注釈は [] 内に示すことにし、内容の素描を 量に圧縮してそのエッセンスを紹介する以下の本文では、紹介調の繁雑を避けて、 おおよそ新書一冊分には優になるであろう。与えられたスペースの関係から、約五分の一の分 文で約六○ページ程の論文である。全訳すると恐らく、四百字原稿用紙で二五○枚程の分量、 的心理学的研究における方法と結果:犯罪の被害者となること」(F.J. Wertz 執筆) という英 門学術的論文集「現象学と心理学的研究」第五章に収められた「ある複雑な生活事件の現象学(シ)

4 本研究の位置する分野と研究問題

され、説明もされてきた。そこで、この研究の目的は、①説明のための単なる例示の域を超え 現象学的心理学研究の一般的必要性とその諸特徴については、既に詳細に論じられ明らかに 現実に必要とされている問題に立ち向かった研究とその成果を具体的に示すこと、そして、

論的現象学』(邦訳は中央公論社刊)で示していたごとく、ヨーロッパの諸科学にはいまだに深 約四十年程昔に新しく誕生した、いわば「被害者/犠牲者中心」の「犯罪被害学 きないとして、 考える。自然科学として構想された心理学には、人間的諸現象に忠実な理解を与えることがで めの仕事が、筆者ウァーツ(Wertz)の恩師ジオルジ(A. Giorgi)によってはじめられたと、 り入れてしまっていることから生まれている。そこで、心理学では、この危機を乗り越えるた 研究しようとする現象の特性を十分に考慮しないまま、自然科学の視点と諸方法を盲目的に採 刻な危機が存在している。ことに人間科学にそれが著しい。その危機とは、それらの諸科学が うというねらいも併せもっている。現象学の始祖フッサールが『ヨーロッパ諸学の危機と超越 には適切で厳密な方法論が欠落していると認められる。そこで、そのような方法論を提供しよ という事柄には一体どのようなことがふくまれているか、ということの研究である。この分野 (Victimology)」の分野内に位置している。その研究主題は、犯罪の「被害者/犠牲者になる」 た問題は、従前から存在し、長い歴史をもつ「犯罪中心」の犯罪学(Criminology)を補う、 人間的諸現象の質的な諸次元を厳密に研究する方法への道を開いた点にジオル

②研究方法論上の手続きをより具体的に詳細に示すこと、この二点におかれている。

194

特定の方法をあらゆるところに押し付けてあてはめるなどということを許さないのである。そ の最終的で決定的な方法などというわけでは決してない。 って、本研究における方法も、心理学における現象学的方法の一つの例であるにすぎず、 れぞれに独自な現象に対応して適切な方法を開発することこそを現象学は求めている。 ジの貢献がある。ところで、「事象そのものへ」を格率とする現象学の意味そのものが、 このことはぜひともここで強調しておかなくてはならない。 したが

経験的研究

名について、被害体験についての聞き取りを行い、その録音をした。被害者の種類の幅は、 る被害者を選び、被害者本人それぞれの合意を得たうえで、電話あるいは面接により、計五十 力により、犯罪の被害にあった人びとの資料のなかから、被害者集団全体を代表する標本とな さて、まず経験的研究として、資料(データ) の収集から、この研究ははじまる。警察の協

被害者・犠牲者となるとはどんなことか、それ以後どんなことが起こったか、などをふくめて 多種多様であった。被害の内容は、暴行、強盗、夜盗、窃盗、レイプ (強姦) 未遂、器物破壊、 るレイプ未遂の被害者の面接内容は、たとえば以下のようなものである。 に応じてなされた。次いで録音されたテープからの文字化がなされた。最初、 述べるように、と求めたのである。もちろん、記述の内容を明確にするための質疑応答も必要 た。面接では、犯罪を詳しく記述するよう求めた。犯罪の前には何が行われていたか、犯罪の いやがらせ(ハラスメント)であり、レイプ、殺人未遂、集団犯罪の被害者は意図的に除外し 教育水準、人種(白人と黒人)、年齢(十八歳から九十歳代まで)などに関して、 文字化されたあ

196

被害者:そいつは失敗したんです。まず、そういっておきましょう。でも、そいつは私を車の 中に押し込もうとしたんです。アリソン [面接の場で、傍らにいる四歳の娘の名]、こ

をざらなこと罪 / っちにおいで。

面接者:彼があなたを押し込もうと……。

被害者:え、え。私、跡をつけられていたに違いありません。夜遅く、道路をやって来たんで んです。 振り向いたんです。車のドアの締まる音がしなかったからです。私、 何かある恐怖を感じるんです。で、後ろを振り向くと、そいつが私のすぐ足元にいた く降りたんです。そして、階段のところまでやって来ました。そして、ふと、後ろを なかったんです。で、すぐに車を降りたんです。ほんとにばかでした。でも、ともか たんです。その車は近所の人のと同じように見えました。だから、私、なんとも思わ す。そいつは私が独りだってことを見たに違いありません。駐車場までつけてきてい [途中省略] いつも肩ごしに

面接者:それで、あなたの最初の反応は驚きだったんですね。

被害者:えーえ、それはショックを受けました。そんなことが自分に起こるとは考えたことも ありませんでしたから。

面接者:そいつが何をしているのかについて、どんなふうにあなたは理解しましたか? たを車の中に引き込もうとしているって、考えたんですね。

被害者:ええ、そのとおりです。確かにそうです。確かに車の中へです。ええ。

197

面接者:それで、そいつは何をねらっているのだとあなたは思いましたか?

198

被害者:わたしをレイプ(強姦)することです。 [途中省略]

面接者:で、次には、どうなりました。

被害者:で、わたしはただただ、悲鳴を上げ、悲鳴を上げ、悲鳴を上げ続けました。

省略」

必要なのである。 していない。そこで、こうした記述を、被害者体験に関連する事柄だけからなるまとまりのよ 直ちに分析できる記述にもなっていない。繰り返しがあり、あっちへ行ったりこっちへ行った の作業は簡単そうにみえるが、決してそうではない。この作業には、少なくとも五つの操作が しかし、こうした記述には被害者体験とかかわりのない余分なこともふくまれており、しかも、 い記述、しかも被害者の一人称態の言葉で表現された記述へと書き改める作業がはじまる。こ 面接により、ともかく、犯罪の被害者となるという事柄の記述が、こんな形で、得られた。 後戻りしたり、などということがあり、記述は、もともとの出来事の時間的経過とも一致

り返し丁寧に読む。 いわば被害者本人になることに努めつつ、本人が意図した意味のままに把握すべく、記述を繰 研究者は、記述された経験に親しむために、開かれた態度で、傍観者としてではなく、

述の全体をいちべつで理解することなど不可能だからであり、偏りを避け、資料のすべてを生 面接資料の、研究者にとっての「意味単位」を区切る。このように区切るのは、文章記

かすためである。 どの構成部分が研究の主題を明らかにすることに関連あるかを判断する。例えば、面接

「そいつは私が独りだってことを見たに違いありません」は、被害の「前」の状況として、ま れることになる。 た「背景」として、関連あり、と判断される。ここでは、関連を見いだす研究者の能力が問わ の場にいた四歳の娘への呼びかけ「こっちにおいで」は関連なし、と判断される。しかし、

時間的経過と正確に対応するように整理する。 ④ 関連する構成部分を互いにもつれ合ったもろもろの意味に従ってまとめ直し、出来事の

冗長な表現を捨てて、第一人称の視点から、被害者自身の言葉で、記述しなおす。

,00

らです。警察は、私に少しも同情的ではありませんでした。まるで私が挑発でもしたかのよう ないように、私があいつの顔にスプレイか何かをかけるとでも思ったのか、顔を覆っていたか く描くように求めました。でも、私にはよくできませんでした。あいつは、 話そうとすると、 後のこと] 警察がやって来ました。でも私はそのことについて話したくはありませんでした。 なことが私に起こるだろうなどとは全く考えたことがありませんでした。 車して、車を降りました。 近所の人の車だと思っていました、同じに見えたからです。私は、私たちの建物のすぐ前に駐 たからです。その車は私を駐車場までつけてきて、駐車場の端に駐車しました。私はその車が 私はあまり気にしていませんでした。その時刻には、たくさんの車がその道路を走って来てい に私を見るんです。『奴を知っていたんか?』と聞くんです。あいつが悪いのではなくて私が 私は夜遅く帰宅の途上でした。一台の車が私の後を走って来ていました。その車のことを 全てのことがよみがえってきたからです。警察の人たちは、彼のことを詳し [途中省略] わたしは非常にショックを受けました。そのよう 自分の顔を見られ [途中省略、事件

追っかけるよりももっと大事な仕事がたくさんあるんだ、と。警察の連中はこう言ったんです。 悪いみたいな感じを持たされました。『奴を確かに知らなかったのか』って聞いて、まるで私 『オーケー。よくある手合いのように聞こえるな』ですって。もし奴がよくある手合いなら、 れとは違いました] 警察が私に与えた感じはこうでした。女の子たちを襲うこういう連中を んじゃないか』なんて言うようなタイプの男でもありえたでしょうけれど。 のことが、私にはずいぶんと助けになりました。夫だって『お前が自分から求めたことだった ってこようとしていただけなんだぜ』と。夫はこのことについて本当に親切でした。そしてそ かじゃありません。私の夫は侮辱を感じて、こう言いました。『おいおい、彼女はただ家に帰 がこのことが起こることを望んでいたみたいな感じを持たされました。私はそんなタイプなん そいつを捕まえるためにどうして何かしなかったんです。どうして、もっとパトロールを増や [でも、夫はそ

出来事の現象学的心理学 体的にも、全くだめになっていたかもしれなかったというのに。 さないんです。

奴のやろうとしたことがうまく行っていたら、私のこれからの一生は精神的にも、肉

に [私の衣服のことで] お世辞でも言ったりすると、いやな感じがして、我慢がならない たものでした。でも、いまでは、そんなことは決してしません。 [途中省略] 男の人が私 れ以前には、飲んだり話したりするために外出したり、男の人に朝食をおごってもらったりし ましたが、結局は、私はそのことを乗り越えました。でも、私はずいぶんと変わりました。あ きは、電話で頼んで、誰かいっしょに来てもらいました。 間は、私は夜八時過ぎ暗くなってからは決して外出しませんでした。それより遅く外出すると 扉にノックの音がすると、逃げ出したくなる思いがしました。 [途中省略] 二、三か月の ついている様子を感じておびえました。電話が鳴るたびに、奴が掛けてきたのだと思いました。 痛がしていました。眠ることもできず。赤ちゃんの世話もできませんでした。 裏庭に誰かうろ のわかるようなものは何も入れないようになりました。 りました。人の目を引くことなんか少しも望んでいません。 んです。すぐに考えることは、その人が私を襲うんじゃないかってことです。今は、 くなりました。あんなことは決して起こって欲しくなかった、と今でも思います。 [途中省略] 誰に対しても疑い深 [途中省略] 長い時間が掛かり [途中省略] 私、財布に身元

.70.

四ページにも及ぶ。全部を邦訳すれば、それだけで、四百字で一五、六枚にはなるので、ここ での詳しい引用紹介は断念し、以上のような断片的引用に留めざるをえない。 こうして出来上がった記述を「個別的現象記述」と呼ぶ。この事例の場合、それは、英文で

理学的に徹底的に考え、その特定の事例があらわにしていると考えられる関連内容を文章に表 ク)に向かう。まず、各面接について仕上げられた前記の「個別的現象記述」をよく読み、心 実現しなくてはならない。「心理学的洞察は発見であり創造なのである。」 ると同時に、ある一定距離を記述から保ち、多面的かつ能動的に理解するということを厳密に 現することへと向かう。これは、研究上で最も困難な局面である。記述によく親しみ忠実であ さて、研究の次の段階として、「個別的現象の心理学的分析」(個性記述的/イデオグラフィッ

る際の、幾分の手助けたらんとするものにすぎないのである。 の能動的な操作として十一の操作を、我々は見分け弁別するにいたった。その概略を素描して そこで、日常的記述に対する、研究者の姿勢あるいは態度に五つの構成要素を、また、理解 ただし、以下は「ハウツウ」的な規則などでは決してない。ただ、心理学的に省察す

・ 心理学的省察の基本的姿勢あるいは態度

以下に示す諸側面は分離しておらず、むしろ互いに重なり合い含意しあっている。

(1) 記述の世界へ共感的に浸り込む。

界とする。 る。体験者の世界の中に自らをおき、可能な限りいきいきとした仕方で、それを自分自身の世 研究者は、記述を、体験者本人によって生きられた諸状況へ接近する手がかりとして、用い

(2) 歩調を緩め、住み込む。

そうではなくて、ゆっくりと歩調を緩め、状況の詳細のすべてにわたって繰り返し思い描く余 かっているかのように、記述の詳細を見過ごしてしまうようなことを、決してしてはならない。 研究者は、体験者が経験したように個々の状況を経験し乗り越えてしまい、あたかも既にわ

地を記述に持たせなければならない。

③ 状況を拡大化し、増幅化する。

ほんのわずかな詳細が研究者にとっては大きな重要性をもつようになる。 きなことになる。そうすることで、体験者の状況の日常性を超えるのである。体験者の世界の 意義全体が拡大され増幅される。体験者にとって小さなことだったことが研究者にとっては大 我々が立ち止まりある物事にゆっくり時間を過ごす場合には、物事はその意味を分泌しその

(4) 信念を留保し、強烈な関心を活かす。

といって、では、その記述を信じなくなるのかといえば、それはそうではないのである。 ならない。このようにして、体験者によって記述された状況を素朴に信じることをやめたから にいるということは何を意味するか、などについて関心を抱きつつ思索する準備をしなければ れた最初の融合を断ち切って、自分がどこにいるのか、どのようにしてそこに来たのか、そこ の仕方は一体どういうことなのか、ということを考えなければならない。体験者との間に生ま の修正もしなければならない。研究者は、いまや、一歩後ろにさがって、 最初は体験者の状況に自然で率直な共感を通して入り込む一方、この素朴な熱中 この状況を生きるこ

者の諸経験の真実性あるいは虚偽性とは全くかかわりない仕方で、研究者はそれらの発生、 ak

206

諸事物からそれらの意味へと向かう。 そして全体構造に強烈な関心を差し向けるのである。

になる。このことが、部分的には、その研究を心理学的にするものなのである。すなわち、心 行動されたがまま、あるいはより一般的には、意味されたがままの状況に、引き渡されること 者にとっての)意味へと、そして、そのような意味がそこから生じたその特定の関与の在り方 理学的研究とは、生きられた諸状況の内在的な意味化への人間の関与の研究である。心理学者 へと向ける。研究者は、このことによって、その体験者によってまさしく経験されたがまま、 いは、非現実性)には関心をもたない。研究者はその注意をこれらの諸事実から、その 心理学研究者は、研究対象である体験者により記述された事物あるいは事態の現実性(ある その状況の意味へと自らの目を差し向けなければならないのである。 その状況に特定の仕方で関与している体験者がその状況を見なしているちょうどそのまま

(原文一七四一一七五ページ)

心理学的省察のさまざまに可能な諸活動

5

い互いに含意しあっている。 以上の一般的姿勢・態度を基礎に、 より特殊化した諸活動を行う。これらもまた、

ある「実存的基準」を用いる。

象とは区別される一つの差異として、あらわになるのである。 されるのである。こうして、その現象は一つのよいゲシュタルト(構造形態)として、他の現 基準に対してあるいはそれを「地」として、研究中の現象は [「図」として] 際立ってきて同定 典型的な日常生活であり、この日常生活の中では、現在研究中の現象が特に意味深い仕方で現 れているわけでもない。言い換えれば、それ以外の諸現象のほうがより顕著なのである。この 心理学者の準拠枠には心理的実存の諸基準が暗黙のうちにふくまれている。その諸基準とは

207

てもよい。「この命題が当の現象をあらわにするとしたからには、私はそれをどのように理解 あろうか。それはどのように関連しているであろうか」などと。 しているのであろうか」とか、 との判断を、 既に下している。そこで、今度は、この判断について、次のように問うて省察し 「個別的現象記述」中の諸命題は当の現象をあらわにし明らかにするものである あるいは、「この命題はその現象について何をあらわにするで

(3) 暗黙の諸地平を看破する。

るということをはっきりと示せるような、そういう事物についての省察を行えるようになる。 は言及されていないにもかかわらず体験者の状況中に、極めて暗黙の仕方でにせよ、現れてい が、体験者による記述を通して体験者の世界と確固たる接触をいったん獲得すると、記述中に によって生きられた現実を構成する働きをしている内在的な意味化に向けられている。 省察は究極的には記述によって指示された状況に向けられている。より正確にいえば、体験者 記述は省察にとり必要ではあるが、しかし、記述それ自体が省察の究極の対象なのではない。 もろもろの区別を行う。

うことによってなされる。 とは、それぞれの命題について、その命題がほかの諸命題とは異なる何を表現しているかを問 研究は体験者の心理的現実の構造のさまざまな契機あるいは構成要素を差異化する。このこ 現象全体の時間的諸局面、空間的構成諸要素、その他の諸部分を差異化するかも知れない。 もろもろの構成部分の諸関係をみる。 研究者は、体験者の生活の異なる諸側面とそれらの変化を分節化す

者は、 その現象全体のなかで、他の側面に依存しているとか、それらを前提としているとか、 構成部分と関係づけられる。 ろの相対的優先性をみる。 いるか、あれとは、あれとは、など」と問う。理想的には、各々の構成部分がほかのすべての いるか、これはどんな位置を占め、どのような貢献をしているか?」である。ここでは、 研究者は、際立たされた各々の構成部分について、「これは、あの別のとはどうかかわって 空間的、社会的)諸関係を徹底して考えるなかで、研究者は、その現象のある側面は、 まとまり、構造の相貌に焦点を合わせている。構成諸部分のまとまりと(たとえば、 もう一つの関連する問いは、「これは、全体とはどうかかわって もろも

出来事の現象学的心理学

(6) 頻発するもろもろの意味あるいはモチーフを主題化する。

考察中の事例の本質的な側面に対する出会いがはじまったことになる。 もろもろの多様な経験の統一性と一貫性を探し求める。繰り返し現れる主題を突き止めると、

210

(7) 不透明性を問いただす。

って、 するものである。これらの領域に特に執拗に住み込み、 プロトコル(面接記録)を分析する際には、常に、研究者が戸惑うような曖昧な領域が存在 意味がわかる/見いだされることが、よくある。 その脈絡のなかで問いただすことによ

8 想像 [自由] 変更を行い、その事例の本質をみる。

この事例の心理にとって、この構成要素は本質的ではないとわかる。このように、経験の各々 理的構造、その意味、が変化するかどうかをみるのである。もし、その意味が変化しなければ、 この構成要素を想像上[自由に]変容してみて、もし、ある別の特定の時間だったら、その心 たして可能かどうか、 変化させないままに、それらが異なるということ、あるいは、欠落するということさえも、果 の側面を変容することにより、何が個人の心理的現実の本質的規定因であるかを知るのである。 すべての構成諸要素、諸区別、諸局面、および、諸主題に関して、その個人の心理的現実を と問う。例えば、出来事の時間は十時四十五分とあったら、研究者は、

言葉に表現する (Languaging)。

心理学的省察だからである。記述を心理学的言葉に変形するのは心理学において沈殿している や厳密には体験者自身の言葉ではなく、研究者の言葉で表現される。表現されるのは研究者の 心理学的に隠れていることをあらわにする記述である。したがって、この局面の諸結果はもは の諸状況への参与を研究者が意味するとおりに厳密な仕方で指示する、心理学的術語なのであ 味との出会いにしたがって、彼の知識的脈絡を背景にしてなされる彼の省察を表現するのだか 的であり、かつ、この事例に特有なものである。すなわち、研究者は、 究者の側の創造的な語りである。というのは、この局面こそが、創造されつつある心理学だか 抽象的術語への単なる翻訳でも、それらへの置き換えでもない。ここに関係しているのは、研 らである。日常的談話から用語を採用することがよくある。しかし、この局面でそうする場合 らである。この語りは事例との研究者の接触から発しているからして、この語りは極めて個人 には、それらの用語の意味は特別なものとなる。その場合には、それらの用語は今や、体験名 この局面を通じて、研究者は自らがわかり/見いだした意味を[言葉に]表現する。 区別、関係などはすべて名付けられ、言葉に表現される。ここでの目標は、 その事例の心理学的意

□ 照合し、一部変更し、再定式化する。

定の距離がある。そこで、研究者が体験者の生きられた状況との接触を失う危険がある。 反映されているか」とか、尋ねる。研究者は、[定式化が出来事と]出来る限りぴったりと当て ちに、「私のいうすべてのことが確証されるか」とか、「体験者の記述のすべてが私の心理学に 体験者によってなされたもともとの記述に常に立ち戻らなければならない。研究者は暗黙のう がって、研究者は自分の省察を経た理解を照合し、一部変更し、あるいは、否定するために、 はまることを欲して、それを達成するために、これまで述べてきた諸操作に頼るのである。 心理学的語りがかかわる場合にはいつでも、いわれていることと体験者の記述との間には一 省察を導くのに、もろもろの実存的現象学的概念を用いる。

めに用いるかもしれない。例えば、ある人物がある主題的対象を経験する場合にはいつでも常 り立つからである。研究者はある一般的理論的概念を、その事例についての彼の思考を導くた この操作は二次的で派生的なものである。その働きはこれまで論じてきた諸手続きの上に成 その対象の内的地平と外的地平とが暗黙のうちにともに与えられている、 ということを知

場合に存在する危険である)ではない。実存的=現象学的諸概念は(前記のようなもろもろの手続 手元にある事柄を歪曲するような概念を押しつけること(これは伝統的な説明的諸概念を用いる 与えられているかを発見しようと自分の思考に圧力をかけるかも知れない。ここでの危険は、 要素のひとつを記述する場合には、研究者はそれとともに他の二つはどのように暗黙のうちに らを促すためにこそ用いなければならない。(原文|七七-|七八ページ) がって、これらの概念を用いる場合には、真の発見と独創的思考の代用としてではなく、 は、研究者はこれらの概念が彼を導いてくれることだけしか見ないことになるであろう。 れるだけのことである。真の危険は、怠慢な省察とそこから結果する浅薄さである。その場合 あて、既にそこにあったけれども見逃されてしまっていたことを、研究者が見るのを助けてく きを通して)諸現象そのものに照らして開発されているので、根本的に記述的な仕方で照明を 実にかかわっている、と信じられている。体験者がこの心理的秩序のこれら三つの一般的構成 う一つの概念は「自己―世界―他者たち」という構造であり、この構造はすべての心理学的現 らの地平を調べるようにと導かれるかもしれない。研究者たちによってときおり用いられるも っているかもしれない。そして、この知識のお陰で、彼はある与えられた事例において、これ

6 「個別的心理構造」と「一般的心理構造」

的構造を解明する仕事である。 であって、以上のような多数の事例をその個別例あるいは特殊例として包括して理解する一般 終わりではない。次に、さらに、一般的なものの心理学的分析(法則定立的/ノモセティック) を越す詳しさであり、ここでも残念ながら省略せざるをえない。だが、この研究報告はこれで の一つの事例の分析は詳細を極めている。英文で一○ページ強、 潜在的現実性、発生。そして現実性。③被害化との闘い。④被害化の「後」の新しい世界。 互関連する下位構造から、成り立っている。①被害化(Victimization)の「前」。②被害化の へと進む。これは、先の「個別的心理構造」と対比される、「一般的心理構造」を目指す分析 の「個別的心理構造」がまとめられる。それは複雑な心理的構造で、いくつかの契機または相 こうした詳細な手続きを経て、この事例の場合に即して、犯罪の被害者/犠牲者になること 全訳すれば、四百字で四○枚

る。③想像[自由]変更をする。④一般性の明示的な定式化をする。 られる。①もろもろの個別的構造の一般的諸特徴を見る。②もろもろの個別的構造の比較をす することは、ここでは避けるほかない。が、手続きを構成する契機として、以下の四つがあげ その手続きについて、「個別的心理構造」を求める手続きに関して述べた程には詳細に紹介

程の比較的簡単な一例を、参考までに、以下にあげてみよう。 英文で半ページのもの、長いものでは、英文で一ページ半、さらに長いものには、英文で約二 しかし、そのまとめは、個々の研究者が、何に焦点をあてて、黙示的な諸点をどれほど明示化 の事例のみでなく、多様でさまざまな犯罪の被害者/犠牲者となることの「心理構造」である。 して述べるかにより多様である。比較的簡潔で粗いものから極めて詳細なものまでありうる。 ○ページ、邦訳なら四百字で八○枚余のものまである。その内から、まず、英文で約半ページ この手続きによって定式化される「一般的心理構造」は、もはや、犯罪といっても、

の地平を伴う親近性をもつ状況の中で、S[体験者]は被害化の出現に衝撃を受ける。 「自由に自ら行う課題を巻き込んだ普通の状況を[図に対する]地として、社会的調和と安全

しい実存を形成する。この実存においては、被害化は保存されると共に抑圧される。この新し 想像、思考を通して、Sの世界のいたるところへと拡張する。そうすることで、今や世界にあ い実存は、被害化よりは好ましいとされるが、しかし、必ずしも、被害化以前の実存より好ま の領域からは取り除かれ、そして、社会的調和が回復される。そのように被害化を苦心して仕 まねく潜んでいる潜在的被害化を克服しようとする。S自身の能動的なもろもろの努力、他者 事件を構成するもろもろの意味をさまざまな状況で生き直し、その意味を、回想、 直ちに始める。この事件が終わった後にも、Sは、被害化の地平内で生き続ける。即ち、 戻し、自己の失われた主体性/力を奪い返すことで、好ましい状況へと立ち戻るための闘いを 況を]理解することでこの衝撃を克服し、有害な他者を取り除き、助けとなる共同社会を取り 志に反するにもかかわらず、このことを止めさせるには相対的に無力である。Sは、「その状 の利己的な目的のためのえじきとする。そして、傷つきやすいSは、そのことがSの価値と意 Sにとって好ましい状況に対する有害な他者が、助けとなる共同社会の欠如の下に、Sを自己 それを克服することにより、即ち、それを統合化することにより、Sは、自ら著しく新 および世界により繰り返しなされる安全の再確認を通じて、被害化は、 緊急の現実性 知覚、予期、

216

しいとされるとは限らないのである。」(原文一九一ページ)

表現にさまざまな変異がありうることが、よくおわかりいただけることと思う。 もう一つの例としてご紹介しておこう。これをお読みいただくことで、一般的心理学的構造の かも力点を変えた、 れているが、それにしても大まかで、詳細な点には欠けている。そこで、もう少し詳しく、し 以上の一般的心理学的構造の記述には、重要なことは少なくとも含意としては、すべて含ま もう一つの「一般的心理学的構造」が用意されているので、それもここに

平で不当なことと思われ、最初は、衝撃と疑惑をもって経験される。犠牲者は、 せることになる。この出来事は、犠牲者にとっては異常な、訳のわからない、倒錯した、不公 じきとしてねらう略奪者としての相手と、犠牲者を、その抵抗にもかかわらず、強いて直面さ 砕は、援助の手を差し延べるいかなる共同社会からも孤立させられたままで、犠牲者自身をえ した生活では当たり前のこととされている社会的調和という地平の粉砕である。この崩壊と粉 「犯罪の犠牲(被害者)」になるということは、日々の安定した生活の崩壊(破裂)と、安定 この出来事の

害体験のもろもろの意味を生きることをはじめる。例えば、現実の犯罪を思い出したりそれに に心の調子が、犠牲(被害者)となることに合っていて、彼の世界の数多くの側面を通じて被 後も、引き続き出会い続ける。言い換えれば、犠牲者は、あたかも心全体にしみ通るかのよう ざまな状況(警察、司法組織、保険会社とのやり取り、そして異様な近所での外出など)で、その ついて考えたりするほかにも、将来において再びそのことが起こることを恐れるかもしれない。 知覚、想像、予期、回想、あるいは、哲学することさえをも通じて)、最初の犯罪状況以外のさま ち、主体的能動性の喪失、略奪的な他者、共同社会の欠落に)、さまざまな経験を通じて(例えば、 この最初の出来事が発生した後、犠牲者はこの出来事を構成するもろもろの意味に(すなわ

見知らぬ人すべてに疑いのまなざしを向けるかもしれない。ニュースでの犯罪報道に注意して 験の一つの全体世界を詳細に仕上げるのである。 だ』などと一般化するかもしれない。『これは弱肉強食の世界だ』とか、『近ごろは、人はお互 外出することを怖がるかもしれない。『警察というものは、必要なときには決していないもの ったのだ』とか、『私からかっぱらったのは彼らのうちの一人だったろうか』とか。 耳を傾けるかもしれない。隣近所の人びとを疑うかもしれない。『なぜ、助けに来てくれなか いに助け合わないものだ』などと哲学するかもしれない。こうして、犠牲(被害)者は被害体 ひとりで

彼自身の責任(不注意や挑発など)を見いだすかもしれない。もろもろの行動的制約 彼は理解、責任と独立を確立するのである。犯罪について考えることで、被害者はその犯罪に ない。とかもろもろの予防手段(車のドアには鍵をかける)などが新しい習慣になるかもしれ 被害体験克服の一つの局面は、被害者が能動的に努力することであり、その努力によって

建への動きがある。例えば、また泥棒を予期して、扉によりよい鍵を付けて歩く、とか。そこ を克服するひとつの動きがある。すなわち、秩序、独立、安全、そして助け合う共同社会の再

同時に、そして、このことと正確に関連して、被害体験が仕上げられるに従って、被害体験

者に共感的に援助しようという手を能動的に差し延べなければならない。そうすることで、被 諸関係を克服させる働きのある、相互に肯定し確認し合いかつ尊敬しあう関係を確立しなけれ 害者体験者の疎外と、他者たちの冷淡さと無神経さとの、打ち壊され、苦痛に満ちた破壊的な 犯罪への予期を『非現実的』と化してしまわなければならない。第三に、他者たちが被害体験 し繰り返し、再主張しなければならない。そうすることで、被害体験者を繰り返し襲ってくる つの必要な側面があるからである。第二の側面とは、世界が平穏な社会性を、自発的に繰り返 ただそれだけでは、被害者の努力は不十分である。というのは、十全の回復にはそのほかにこ して、人間生活の避けがたい逸脱を理解をもって受容することへと動くかもしれない。しかし

ない。被害者はまた、暴力や不正を自分自身が行う可能性があることを認めるかもしれず、そ

220

体験者はより責任をもち、独立的となるであろう。そして、相互性の新しい諸関係が、共同社 とあきらめを結果する可能性がある。しかし、これら三つの側面が満たされる限り、この被害 れていない。これらのうちのどの一つが欠けても、さらに深刻化した被害者体験、絶望、 被害体験を克服するこれら三つの側面は、すべて必要なのであるが、どれ一つとして保証さ

会のより深い感覚とともに、被害体験を統合し克服する闘いを通して形成されるであろう。 (原文一九二―一九三ページ)

外的現実に沿っているというよりも、もろもろの内在的な意味を示しているものである。 理構造」も示されうる。これは、「前」、「出現」、「被害化に抗しての闘いの布置」、「後」、そし て「新しい秩序」という五つの見出しの下にまとめあげられている。これは、時間的流れや、 以上の「一般的心理学的構造」の約十倍の分量からなる、さらにいっそう詳細な「一般的心

7 おわりに

への圧縮である。紹介者の極めて主観的な偏りを、むしろ積極的に生かした要約である、 もっとも、初めに、原執筆者に成り代わっての素描と称してはみたが、約十分の一の分量

以上で、本研究の概略の、執筆者自身の第一人称的な視点からの素描を一応終えることにす

の中から、本格的な研究に赴く方々が少数であれ日本にも現れる、そのための小さな契機の一 して、多くの読者がそのごく一端にふれ、その本質を看取し、それに魅力を感じて下さり、 礎的研究と実践および実践的研究、臨床的研究が、これまでにない緊密な関係をもちうること のあり方、などへ示唆するところは極めて大きいものがあるように思われる。このように、基 レイプ被害者の事件後の心理的カウンセリング、被害者に対する周囲の人間のなすべき心遣い(4) きい。また、この具体的事例に即していえば、レイプ(強姦)の被害の防止対策、あるいは、 点を、広く日本の読者に知らせることにある。この研究は、いわゆる臨床的研究というよりも うに、②その研究方法論とその具体的手続きの詳しい展開もまた既に存在すること、以上のこ 的な「現象学的心理学研究」が既に存在すること、そして、多少とも力点をおいて紹介したよ 明することを、どうかお許しいただきたい。ここでの紹介者の意図は、①本研究のような本格 つに、このささやかな紹介がもしなるならば、紹介者として、これに過ぎる喜びはない。 人間の体験に関する基礎心理学的研究である、といってよいであろう。にもかかわらず、臨床 生きた人間経験を詳細に研究する「現象学的心理学」の一つの特徴である。この素描を通 犯罪予防一般、あるいは、犯罪被害者/犠牲者の事後の心理療法に示唆するところは大

引用文献

- E・キーン 現象学的心理学に関して日本で出版されている代表的文献は以下のとおりである。 吉田章宏・宮崎清孝訳『現象学的心理学』東京大学出版会 一九八九
- A・ジオルジ 早坂泰次郎監訳『現象学的心理学の系譜』勁草書房 一九八一
- ラマニシャイン 田中一彦訳『科学からメタファーへ』誠信書房 一九八四 V・ベルク 早坂泰次郎・田中一彦訳『人間ひとりひとり』現代社 一九七六
- 田中一彦『方法論からの心理学』勁草書房 一九八二
- 355. が参考になるであろう。「現象学的心理学」を初めて探究してみようという読者は、たとえば以 Perspectives in Psychology: Exploring the Breadth of Human Experience. Plenum Press, 1989 pp. ロロ・メイほか編 伊東博ほか訳『実存:心理学と精神医学の新しい視点』岩崎学術出版社 一九七七 英文文献としては、Ronald S. Valle and Steen Halling, Eds. Existential-Phenomenological
- 上のような文献を手掛かりになさるとよいのではないかと思う。 Edited and with an introduction by Amedeo Giorgi "Phenomenology and Psychological
- Research" Press, Pittsburgh; Duquesne Univ. Pa. 1985.
- Complex Life-Event: Being Criminally Victimized." pp. 155-216. Frederick J. Wertz "Method and Findings in a Phenomenological Psychological Study of a

qualitaive data analysis. Journal of Phenomenological Psychology. 14(2). 1983. Wertz, F. J., From "everyday" to psychological description: An analysis of the moments of a

4 美女たち」の報道によれば、ニューヨークでは女性三人に一人がレイプに遭遇しているといわれてい 件の後の被害者/犠牲者の心理的カウンセリングの問題が、社会的にも現実的緊急性を有するにいた る、とのことである。米国ではレイプの予防はもちろんのことであるが、それだけでなく、 から三時三十分再放映)のスペシャル番組「犯罪都市ニューヨーク24時:殺人現場・レイプ魔と闘う っているものと想像される。 一九九二年(平成四年)三月九日テレビ東京(東京12チャンネル)放映(同年七月二九日午後二時 レイプ事

罪被害者の実態調査」が犯罪被害者支援のために、法律学者と社会学者でつくる「犯罪被害者実態調 たような「被害体験の意味と構造」の詳細な研究が、今後取り入れられていくことが望まれよう。 ことである。方法は主としてアンケート調査によるとの報道であった。それに加えて、ここに紹介し 査研究会」(代表・宮沢浩一 さらにまた、一九九三年三月一八日の朝日新聞(夕刊)の報道によれば、日本でも、ようやく「犯 東京医科歯科大学教授)、警察庁科学警察研究所のグループで行われることになった、との 慶応大学教授)、精神医学者と心理学者「被害者心理研究会」(代表・

〈執筆分担〉

第一部編者

稔(はたせ みのる)

京都大学大学院教育学研究科博士課程修了、教育学博士 一九三一年、岡山市に生まれる。 「エンカウンター・グループと心理的成長」(創元社)他 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科教授、 京都女子大学名誉教授

第二部

章 伊藤 隆二(いとう りゅうじ)

九三四年、

東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了、教育学博士 「伊藤隆二教育著作集(全5巻)」(福村出版)他東洋大学教授(大学院担当)、UCLA客員教授、 秋田市に生まれる。 横浜市立大学名誉教授

著書

2 章 上田 吉一 (うえだ よしかず)

京都大学文学部哲学科卒業、同士一九二五年、大阪府に生まれる。 「白己実現の達成」(大日本図書)他「精神的に健康な人間」(川島書店)、「自己実現の心理」「人間龍谷大学教授、姫路工業大学ならびに兵庫教育大学名誉教授学文学部哲学科卒業、同大学院(旧制)修了、教育学博士 「人間の完成」

3 資 村山 正治 (むらやま しょうじ)

著書 「エンカウンターグループとコミュニティ」(ナカ現在 九州大学教育学部教授、日本人間性心理学会運営京都大学大学院教育学研究科博士課程修了、教育学博士一九三四年、東京都に生まれる。 「エンカウンターグループとコミュニティ」(ナカニシヤ)他、州大学教育学部教授、日本人間性心理学会運営委員長、日本心理臨床学会常任理事

4 章 黒田 正典(くろだ まさすけ)

主要著書 「心の衛生」(協同出版)一九五三 「書の心理」(誠信書房)一九六四岩手大学・東北福祉大学等教授歴任。文学博士。東北大学名誉教授。一九四〇年東北帝国大学法文学部心理学科卒、一九四五年同大学院修了。新潟大一九一六年二月二十九日生。宮城県仙台市出身。 新潟大学·東北大学·

5 章 神 保 信一 (じんぼ しんいち)

「登校拒否のすべて」(共編著、第一法規)著書 「学校相談心理学の展開」(金子書房)、「不登校への対応と予防」(金子書房)東京大学大学院教育心理学専攻博士課程修了、明治学院大学大学院文学研究科心理学専攻教授一九三〇年、東京都に生まれる。

6 章 吉田 章宏 (よしだ あきひろ)

一九三四年、 東京に生まれる。

東京大学教育学部教育心理学科卒業。米国イリノイ州立イリノイ大学大学院修了、Ph. D.

現在

「学ぶと教える」(海鳴社)、「教育の方法」、「教育の心理」(放送大学教育振興会)他岩手大学教育学部教授、東京大学名誉教授

一九九六年三月二五日 人間性心理学とは何か 第一刷発行

者 畠瀬 Minoru

Hatase

1996

発行者 金子賢太郎

発行所 大日本図書株式会社

東京都中央区銀座一─九─一○ 郵便番号一○四

電話○三─三五六一─八六七八(編集)、八六七九(販売)

印刷所

星野精版印刷株式会社

製本所 株式会社明 泉堂

ISBN4-477-00045-6 Printed in Japan